

新聞醜悪録続貂

——言語時評・十五——

十一年前、毎日新聞は、「数字を読みやすく」するために「漢数字が原則だった数字の表記をきょうから洋数字に変えます」という社告を出して数字の表記を変えた（1906. 4. 10）。予測していたその日が遂に来たことをしって、わたしは論文「現代表記の論理と美学」（『成城国文学』十五号 1909. 3）を次の文章で結んだ（以下、旧稿とする）。

「いわんと欲することがなんであるとも、それを言いあらわすには一つの言葉しかない。」（杉捷夫訳による）、モーパッサンは『ピエールとジャン』の初めにこう記している。日本語には正書法がない。だからなおのこと、その言葉をそこに書き記す最適の表記を

選ぶことが、書き手の責任になるのである。

去りし二月の転居を機に、わたしは二十年來の毎日新聞購読をやめた。不快に金を払うことはないからである。しかし今、わたしが快く読める日本語の新聞はない。

以来、出勤した日は学部の講師控室で一服しながら備えつけの新聞を瞥見する。長い休暇中は新聞をみない日が続くことになる。日曜日だけは読書欄をよむため、近くで朝日新聞を購入して不快感の増殖にたえている。朝日に義理があるわけではない。定点観測するために変えないのである。

工藤力男

新聞の日本語を醜悪だといったのは高島俊男さんである。旧稿にもひいたこの人の率直な発言「新聞醜悪録」（文春文庫『本が好き、悪口言うのはもつと好き』、初出は『出版ニュース』1991.4。以下、高島Aとする）の威を借りた統紹である。言語に対する高島さんの感性はわたしときわめて近く、その発言のほとんども賛成できる。専門領域は中国学と日本学で異なるうえに、学識の深さと広さは比べべくもないのだが。

高島さんは「一年三〇〇六一〇五日?」（お言葉ですが…）文藝春秋1996。以下、高島Bとする」と題して、毎日新聞の社告にすぐ反応した。だが、わたしと違ってその方針には賛成だという。理由は高島A所収の「年は二八か二九からず」にみえる。「十日」とかいた原稿を、出版社の編集部が勝手に「一〇日」に変更したことなどへの怒りを記したうえで、そのように「百」を「一〇〇」とかくよりも「100」とかくほうがましだという。横のものを縦にすることを認めたのである。

ここには、文化の受容における、東の〈縦の原理〉と西の〈横の原理〉の衝突が生んだ困難な問題があり、事は新聞に限るわけではない。毎日新聞が先じたこの方式は次

第に他紙に及び、読賣は二千五年三月に踏みきった。日本語の使用は健康だった産經もいつのまにか変節している。毎日のこの方式の原則を、高島さんは「数はアラビア数字で書き、語は漢字で書く」と要約した。その結果、新聞紙上の日本語の光景はどうなったかを本稿で検証する。以下、朝日新聞は紙名を省き、括弧内では讀賣、毎日、産經、東京の各紙を頭文字ですませ、夕刊には小字「夕」をそえ、必要に応じて改行箇所を二重線「=」で示す。旧稿からひく用例には日付を省く。

新聞社は読者の投書も社の方針で書きかえるようだ。「いじめを防ぐ=リボン」は「1歩」（2006.12.24）は中学生の投書の標題である。文中には「第1歩」とあるように、一段の枠に標題を二行組みするため「第」の字を削ったうえで「1歩」を「1歩」にかえたのである。このイッポは〈歩数〉にあらず、「わずかな距離やへだたり」（新潮現代国語辞典）を意味する〈語〉である。旧稿には、毎日新聞の「自立の第1歩」「1票の格差」「1村1品運動」などをあげた。新聞記者は「一日一善」をしらないのだろうか。

生活欄の投書「父の描いた絵馬」（2006.12.24）には、

「2階の3畳の部屋」「30余年」など、数の表記がいくつもある。当人の表記がいかほど残っているか知らないが、これが六十歳の主婦の表記とは考えがたい。かりにそうであつても、編集部で書きなおすべきものである。三畳間は日本建築で最小の居住空間を含蓄する。我が学生生活の始まりは、しもたやの二階三畳間であつた。「一階」(2006. 8. 27 生活面)と「2階」を書きわけるのはなぜだろうか。「30余年」には高島Aの記述がそのまま適用できる。すなわち、「十数人」というばあいの「数」は不定詞だが、「一〇数人」では一の位まで明白なので、不定詞が続くのはおかしいのである。ここも当然「三十余年」でなくてはならない。

朝日新聞の紙面全体の数詞表記の方針は、訓よみは漢数字、音よみは洋数字とみえる。すると、六十七歳主婦の投書(2002. 2. 4)の「一人、2人、5人」は、それぞれ、ヒトリ、ニニン、ゴニンとなるが、それでいいのか。たまに目にする「4人」はシニンか。同じことは書評についてもいえる。依頼原稿の表記には編集部が手をいれることは少ないようなので、執筆者の言語能力が露出する。例えば、「六つ、12人、18世紀、2人、一二」(陣内秀信稿、2006. 7.

9)。

四十三歳主婦の「大切な二人応援」(讀2007. 3. 12)の本文には、予後の父と小学校を卒業する娘の「2人を応援していきたい」とある。三宅島復興のために二輪バイクの国際レースをやるうという記事の見出しが「島で2輪レース」(讀々2006. 6. 5)で、本文は「二輪」である。「ダウンサイジングにつぼん」(2003. 6. 1)は、本文に「2ケタは成長した」、写真のキャプションに「二つの自治体」とする。見出しと本文とで表記をかえる意図がわたしには理解できない。

現在の新聞は表記に調和と統一を考えない。その醜態ぶりを少しあげる。「約300本のうち一本も入賞を果たせず」(毎1998. 1. 12)、「2千数十億円」(2002. 4. 28)、「千人以上の入院患者と100人以上の職員」(2003. 4. 20)、「6年に一度」(2005. 1. 16)、「3世代・百年」(2005. 6. 19)「1日に一度=75%が使う」(2006. 8. 20)「数十〜100倍」(2006. 9. 3)、「千人から2700人」(2007. 2. 25)、「100倍〜千倍」(2007. 3. 5)。福岡が「100万都市」(2005. 10. 2)だが、「100畳敷き」(2007. 2. 11)は当然なのだろう。

う。長瀬などの奇勝は「1000畳敷」か。天下の大新聞が率先して進めるこの方式を群小新聞や広報がまねるのは当然で、「千500〜3千円」（広報東京都 2005: 2）、「26万63円」（広報まちだ 2005: 2、11）となる。

日仏独三国による中国の高速鉄道受注競争を、東京新聞は「高速鉄道『3国志』」の見出しで報じた（2002: 6、24）。毎日新聞夕刊の短詩形文藝を扱うコラム「風のことば」で、平安時代の歌合せには「1500番勝負」もあつたとするのは、「千五百番歌合」を意識したこと疑いない（旧稿）。この調子で「小倉100人1首」と書きかねない。

高が数の表記と読む人は次の一文をご覧られよ。

ギリシャ神話「イリアス」などを読むと、日本と同じように8百万の神が登場する。

「朝日求人」一面、事業の成功者の談話をまとめた記者の文章である（2006. 10. 22）。これを「やおよろず」と読めるとのたまうだろうか。

日本新聞協会発行の『放送で気になる言葉』（2003）という本がある。新聞協会がなぜ放送用語を心配するのかわからないが、冒頭の「この冊子の使い方」に、配列は「原則として50音順」だとある。編者は五十音と50音の違いを

しらないようだ。いま流通している五十音図には、「ん」を入れても、四十六字、四十五音しかないのが普通だからこの記述は二重の誤りを犯しているのである。

新聞の例ではないが、先年、世田谷区内の六つの大学が提携することになり、その組織を「世田谷6大学コンソーシアム」と名づける案が教授会にかかった。本学は学習院大学等と「四大学」提携体制を作つて久しい、組織の名前は固有名詞に準じ、東京六大学の例もある、逐年で大学数がふえるような組織ではない。わたしはそういつて「六大学」とすべきことを主張したが、支持がえられなかった。伝統と原則を無視して「六」を「6」にかえたとして、何の益あらんや。

金田一春彦さんへの私信に「金田1」様が出現し、毎日新聞の「余録」は「世界4大文明」とかく（旧稿）。やがて2宮尊徳、北島3郎が出現するだろう。「6か国協議」が報道に溢れているのだから、歴史の教科書に「6朝時代」「5胡16国時代」をみる日も近い。新聞は「富士5湖」「7福神」「金沢8景」とかくに違いない。

円グラフのように記号と指示対象との間にみられる構造

的な対応を、鈴木孝夫さんは「構造的写像性」といい、その論理を「写像原理」と称する（岩波新書「教養としての言語学」）。アラビア数字による記数法は、桁の数がそのまま数の大きさに反映する写像原理によっている。一方、数も単位も漢字で表記する東洋の方式はそうではない。これの混ぜ書きが長所を消しあうのは当然である。旧稿にあげた、成城学園創立八十周年記念募金の「漢字 129,382,103円」を、一瞥して比較で対する「漢字 129,382,103円」を、一瞥して比較できる人がどれほどいるだろうか。東洋の計数法は四桁刻みなのに、西洋の三桁刻み記数法によるものだから、わたしなど、一、十、百、千……とたどらなくてはならない。

高島さんが忌避した「一年三〇〇六一〇五日？」方式が普及したのは、キリスト暦が一般化したからだろう。世界が狭くなり、元号制との切りかえは厄介きまらない。明治十年をキリスト暦の千八百七十七年に移すと、一挙に五字ふえる。そこで、横原理の記数方式から「位」だけをかきりて縦原理に応用した記数法で一八七七年とした。だが困ったことに「0」にあたる漢字「零」が使いにくい。一から九までの数字に比べて画数がやたらに多く、例えば“1203”は「一二零三」となって空位が最も目だつ。そこ

でやむなく「0」をかりて漢字列に交えた。わたしはそう推測する。

この方式を出版界では「漢数字位取記数法」などと称するらしいが、「0」は漢字でないばかりか、起筆位置も運筆方向もわからず漢字もどきでさえない。わたしは本稿をかくにあたって、JISの漢字コードが「0」と「0」では異なることを初めてしった。我がワードプロセッサの画面では二つを区別できるが、印字したものは同じに見える。実際の印刷では刷りわけているとは思えない。最近、半藤一利『昭和史探案 1』（ちくま文庫）をよんでいて首を傾げた箇所がある。「リコール票四〇九万〇五七八票」(B15)の二つの「0」が数とはみえなかったのである。

多くの倭字を作った日本人が0に相当する倭字を作らなかったことは悔いて余りある。日本の鉄道の初期、時刻表は縦書きで、空位の「0」には毛筆の片仮名「ワ」に近いものがある。下に短い横画を加えていたら、漢字列に調和する倭字ができただろうに（片仮名の「ワ」は「和」の旁「口」から生まれた。やはり初期の時刻表には、「0」が他の漢数字より若干小さく印刷されて空位であることを主張しているものがある。明治期の日本人の智慧だろう。「0」

を使うなら、そうしたくふうが欲しい。

その空位の「〇」、当初は「二千〇〇四年六月」（朝野新報 1874.11.15）などともかかれた。読みあげ算などの「跳んで」の要領、まさに空位である。この方式は、明治六年の「小学校及生徒全員畧表」（朝野新報 1874.11.7）のように、多数の項目を一覧させる統計などに特に有効であった。多くの国民がこれを目にするのは鉄道の普及による。東海道線全通時に発行された官報附録「時刻運賃及哩数表」（1989）は、縦組みで現在なみに整っている。

この記数法による商品の価格表示「三、二〇〇円」「一、〇〇〇円」「一、九八〇円」が、いずれも〇の誤脱であったことを旧稿に紹介した。四桁刻みの日本語を西洋の三桁刻みでかいたゆえの珍事である。ここには、今年のラジオ第一放送のニュースできいた三例をあげよう。一月十四日の朝、ニューヨーク市場の株価を「二千某々」と読んで「二万某々」と訂し、三月六日の朝には「一万二千某々」と報じて「一万二千某々」と直した。五月十日夜のNHKジャーナルで、司法試験制度の変更による弁護士登録者数の増加を、前年比で「百人余り」と言ってから「千人余

り」と言いかえた。原稿は「一〇〇」で改行してあったのだらうか。

縦の原理と横の原理の衝突が招いたこの矛盾に対して、わたしは闇雲に反対するわけではない。そのたちばを旧稿には左記のようにかいた。

日本人の言語生活で、数を表記する機会が最も多いのは年月日であろう。だから、多くの国民が、キリスト暦の年次と住所の番地に限ってこの混合方式を了解するならば、それもよしとすべきだらう。

「一九八〇年一〇月二〇日」は、年月日ともに漢字代理の「〇」を含む漢数字記数法であるが、年に限って「〇」の表記を認め、月日は伝統どおり「十月二十日」とかこうというのである。キリスト歴が頻繁にでてくるような文章に何回も「千九百云々」と書くのは鬱陶しいだらうから。著作のどこで宣言したのか知らないが、高島さんも「二千三百年も前の大昔」「西暦で言うと一三〇〇年」と、この方式でかいている（文春文庫『お言葉ですが…』③）所収「文化輸入国の悲哀」。三桁の年も四桁に準じ、例えば「七九四年」とかくことを認めざるをえない。よく目にする混合方式、例えば「十一月二五日」はいかにもおかしい。因みに、

わたしは手書きでは「廿」「卅」とする。

我が勉強部屋は、ある町の四丁目八番一号にあり、居室は集団住宅の一〇三号室である。近年の住所録はたいいてい横組みで、丁目・番などは「一」にかえて「4-8-1」とされることが多い。これが困るのは、通りと街衢の「四丁目八番」は固有名詞であること、特に「丁」は、古代都城・条理制などの「条」に同じだということである。1条天皇や4条派や6条院は変である。居室の「一〇三号」は百三番目を意味せぬ、一階の三号室の意で、「〇」はまさに空位、イチマルサンとよむ道理である。

数字の大きな地番表示は厄介である。明治維新に実施された地番整理の結果、五桁の番地もあるという。わたしは「三千二百五十六番地」のようにかくが、キリスト暦の年次と住所表示は例外と約束しておけばよい。そうすると、三三五五、三三九度、七五三、六三制、二六時中、十四五人なども誤読がさけられる。数字が多く用いられる新聞記事、例えば国家予算の解説などは、株式市況・放送番組・野球のテーブルなりに横組みすればよい。これらの紙面に必要なのは精確と簡明であって、日本語の美しさではない。

数字の表記を原則として洋数字にかえた理由を、讀賣新聞のコラム「編集手帳」は「一瞥して頭に入りやすいことなど、洋数字の利点はいくつかある」とした(2005.3.2)。そして『江分利満氏の優雅な生活』をひき、「平凡な勤め人の日常が日記をつづるような淡い筆づかいで描かれている」として、「千二百円」式の少々いびつな表記を、時代の変わり目にめげない戦中派世代の違和感とみている。この作品は純粹な一人称視点でかいておらず、続篇『江分利満氏の華麗な生活』ともに小説作法に違反している。その乱雑に走り書きした「1昨年」「2異手」「3振」などずばらでいびつな表記を、天下の大新聞が採用して得々としているのは面妖というほかない。

洋数字が目につきやすいのは、文字の構成原理が漢字・仮名と異なるので目だつだけのこと、いな、目だちすぎるのである。だが、目につきやすければよいものであろうか。見出しの「00年」はどう読むのか、「26万3456円」に整合性があるといえるか、平安時代の学者、大江匡房の没年を「1111年」と書いて快いか、とわたしは問いたい。「光回線契約500万件超す」(2006.6.4)という四百字たらずの記事は、七ヶ所で契約者数を縦組みにし、数字列の途中

六ヶ所で改行している。わかりにくいことこのうえもない。算数や数学の教科書に、数値の途中で改行したものがあつたらみたいものだ。

ローマ字綴りも同じこと。ある藝人からの聞き書きの一部に、

12月10日に東京・ルミネ

h e よしもとで単独ライブ

「博多 t h e よしもと7じす

ぎく染まつてたまるか」をや

ります。(2006. 6. 10)

とある。日英語混合表記を一読して、わたしはなんのことかわからなかった。ケンブリッジ大学で出版された本の題を

『V i b r

a t i o n s a n d

W a v e s i n P h

y s i c s』(2007. 1. 28)

と二箇所でぶつぎりにしたのは、横のものを縦にしたのだから日本語なみだというのだろうか。

横のものを横のままにかいたらいいというわけでもない。

「踊る大捜査線 T H

E M O V I E」(2006. 10. 1)

Think Globally, Ac

t Locally! (2007. 4. 1)

はともに教育欄の例。メジャーリーグでホームランを打つた田口選手の談話

「Who expected I

would hit a home r

un?」(2006. 10. 15)

もある。英語の音節に配慮せず語の途中で改行することを、記者や校閲部員はどこで学んだのだろう。読者層がかなり限られるに違いない。日曜日の読書欄も同様で、

Alpho

nso Lingis (2007. 2. 18)

N

orna Johnston (2007. 4. 15)

Le

onard J. Schoppa (2007. 4. 22)

とある。

洋数字表記を採用した新聞社の真意は別にある、とわたしはみている。紙幅の節約である。「五月八日」と「十二月三十一日」の字数は四対七だが、「5月8日」と「12月31日」は同じになる。洋数字の効果は見出しにおいて特に顕著で、大きな見出しには四桁までの数字をくみ、一字分に圧縮している。だが、本文ではそれが無理で一行にくむので、かえって紙幅をくう皮肉な事態になる。同じ数値を一行に収めるにあたって、見出しでは横に、本文では縦にくむ、これこそ世上に氾濫する、新聞の醜悪日本語の極みである。

統一地方選挙が始まる日の読売新聞は、東京版に都の選挙人名簿登録者数を二段抜き見出しで次のように報じた(2007. 3. 22)。

都内有権者数 104万 9204人

本文には前回比の増加数をあげており、当日の有権者数はかわるのだから、一の位まで示す必要は全くない。「約千四十万人」で十分である。

左に掲げる二つの見出しを読者はどうみるだろうか。

北海道開発局

減員数1003人に

(2006. 5. 28)

国交省方針 甲

2カ月で1万8000件 乙

いじめ相談

1000件の日も

(2007. 4. 15)

甲は、北海道開発局関係の国家公務員数の純減を千人以上にすることが求められていた時期の記事である。そこで重要な千三人という数を、わたしの老眼では読みにくい肩身の狭い字で報ずべきではない。乙の副見出しは続く三つが0なのでどうにか読めるが、8369とでもあったら老眼鏡に拡大鏡を重ねなくてはならない。乙の本文は、三月三十一日だけで「約1000件にのぼった」と結んでおり、見出しの100は概数だったのである。高島さんがいうように、一の位の0は、数値が定数であることを意味する。

中国の新聞『人民日報』はいつからか本文を横組みにした。見出しには縦組みもあり、その組み方が徹底している(2007. 3. 7)。ごく稀には「二〇〇七」型もみるが。

2007年国民经济和社会发展计划草案的报告(摘要)
关于2006年国民经济和社会发展计划执行情况与

融通無碍に安住するこの国の新聞と、原則に頑固なかの国の新聞との違いである。そして、この方式は週刊誌に広がって久しく、余波は一部の月間総合雑誌にも及んでいる。そのうちわたしは「総合雑誌醜悪録」を書かねばなるまい。本稿に述べたことは国語政策の一環として処置すべきなのに、議論されたという記憶がない。むかし国語審議会、いま文化審議会国語分科会の怠慢のつけである。

今春の本学某学部の入学試験、国語〔二〕の本文は十三の小段落からなり、一から十三まで番号がついていた。最後の設問に、これを大きく起・承・転・結という段落構成でとらえると、結に相当するのは第何段落以降か、「漢数字」で答えなさい。」とあった。それに対して、「10」とか「11」とか書いた答案のなんと多かつたことか。漢数字をしらない日本人がよっぽど殖えているのだらう。

千葉県茂原市の婦人が、娘婿「十」さんの誕生日を祝うケーキを電話で注文し、名前を念入りに「漢字のジユウ」と伝えた。ケーキ屋から届いたそれには「10さんへ」とあったという(2001.3.4生活欄)。

(二千七七年春)

追記

査読してくれた編集委員の意見によって訂正しえた箇所がある。意見の中には、横書きはいかに、という質問もあった。本稿は縦書きに限って論じたが、横書きのばあいは、横すなわち〈西の論理〉が加わるので当然異なる。縦書きで大江匡房の没年「1111」がおかしいように、横書きで「1111」はおかしく、「1111」が釣りあう。しかし、二人三脚、三三五五、四捨五入などは縦横に関わらない。これらは辞書に搭載される「語」であって、変化しつづける「数」ではない。縦の「七八人」を横に「78」とは書けないのだから、是非アラビア数字で書きたかったら、「7(人)8(人)」「7(人)8(人)」とでも書くほかないだらう。縦か横かで文体も変わるといふことである。初校の最中、七月廿二日の朝日新聞「ニニニ360」欄に訂正記事がでた。十五日の同欄「市民の財政白書」のメモ「04年からの三位一体改革で削減された地方交付税の額」の「51兆円」は、「5兆1千億円」の誤りだという。元の資料には三桁刻みの「510,000十円」とでもあったのだらう。(初校のおりに記す)